道徳基盤構造の再検討および勤勉の抽出と尺度開発

山縣　芽生

【序論】

本研究は，道徳の多元性を前提に道徳の詳細な構造を解明するため，道徳の因子構造の検討，追加すべき基盤としての勤勉の提案 (研究 1)，勤勉を量的に測定する尺度の開発と道徳基盤理論に新たな因子モデルを提案 (研究 2)，開発した尺度の妥当性検証 (研究 3) を目的とした。

2000 年代の心理学では，人間の多様な価値観を解明するために，道徳の細分化を目指した道徳基盤理論 (Haidt & Graham, 2007; Haidt & Joseph, 2004) が主流となった。同理論は，道徳を Harm, Fairness, Ingroup, Authority, Purity の 5 つの基盤に分け (Haidt & Graham, 2007)，Harm と Fairness 基盤は「他者や社会から個人の権利の保護」に関わる個人主義的な道徳として上位概念の「個人基盤 (Individualizing)」に，Ingroup, Authority, Purity 基盤は「役割や義務を通した個人同士の結束」に関わる集団主義的な道徳として「集団基盤 (Binding)」にそれぞれまとめた (Graham, Nosek, Haidt, Iyer, Koleva, & Ditto, 2011)。さらに，これらの基盤は進化の過程で獲得され，生得的かつ普遍的であり，社会・民族・文化に左右されずに備わっているとした。

しかし，2010 年以降には，5 基盤を反映した統計的因子モデルの当てはまりが良くないという実証的結果が示されたことをきっかけに(e.g., Bowman, 2010; Davies, Sibley, & Liu, 2014; Kim, Kang, & Yun, 2012; 村山・三浦, 2017, 2019; Nilsson & Erlandsson, 2015; Yalçındağ, Özkan, Cesur, Yilmaz, Tepe, Piyale, Biten, & Sunar, 2017)，道徳基盤の普遍性について議論が深まった。特に，特定の信仰を持たない人が多い日本で (西, 2009)，一神教的世界観に基づく Purity 基盤の存在を仮定することは現実的ではない。5 基盤を反映した尺度 (MFQ: Moral Foundations Questionnaire) の妥当性検証 (Graham et al., 2011) では，英語を母語とする白人参加者の偏りがあるため，この尺度における道徳的事象の文脈が日本人に適用できるかは疑問である。もっとも，自己を取り巻く自然や神との関係性，貞節の捉え方に西欧との文化差が存在している (北村・松尾, 2019) ことを考慮すると，日本人を対象とした本研究では，Purity 基盤の存在を仮定すべきではない。そこで本研究では，Purity 基盤を想定せずに分析から除外した場合の日本人の道徳構造を解明した。

さらに，5 基盤と同様に重視されるべき追加基盤として「勤勉」を提案した。道徳基盤理論は既存の 5 基盤を最終的な道徳の要素とは結論づけてはおらず，今後の研究の発展により今の理論モデルは変わる可能性があるとし (Graham, Haidt, Koleva, Motyl, Iyer, Wojcik, & Ditto, 2013)，道徳の構造の更なる検討を期待している。実際，Suhler & Churchland (2011) や唐沢 (2013) は，科学的根拠はないものの，勤勉を新たな追加基盤に提案している。そこで，本研究では，5 基盤に該当しない追加基盤が存在するのか，さらにはどのような性質を持った道徳なのかを実証的に検討した。

【研究 1】

研究 1 では，5 つの道徳基盤のそれぞれにどの程度依拠するかを測定する MFQ (Graham et al., 2011) の日本語版 (金井, 2013) を使用し，道徳の構造の解明を行った。確認的因子分析の結果，「Purity 基盤を除く 4 基盤から構成される個人基盤と集団基盤の 2 因子のモデルの当てはまりが最も良い」とした仮説 1 が支持されたことから基盤の構造は，Graham et al. (2011) が主張する 5 基盤だけではなく，Purity 基盤を除く Harm, Fairness の個人基盤と Ingroup, Authority の集団基盤の 2 基盤である可能性も示された。

また，善悪行為に関する自由記述の分析の結果，「5 基盤に該当しない追加基盤が存在する」とした仮説 2 が支持され，既存の 5 基盤には該当しない「勤勉」が道徳基盤理論に追加すべき基盤である可能性が示された。

【研究 2】

研究 2 では，勤勉を量的に測定することを目的に，研究 1 の自由記述データから日本人の道徳観を測る予備尺度を開発し，日本語版 MFQ との関連を検討した。相関分析の結果，勤勉に関する因子は Purity 基盤と正の相関関係を示したため，「予備尺度と MFQ は類似因子間で正の相関関係が見られた。そのため，「勤勉に関する因子は有意な相関関係が見られない」とした仮説 3 は不支持であったものの，勤勉に関する項目を改良する余地があった。また，確認的因子分析の結果，「P 基盤を除いた Harm, Fairness の個人基盤と Ingroup, Authority の集団基盤，追加基盤因子の 3 因子モデルが最も当てはまりが良い」とした仮説 4 の提案モデルは不支持であったものの，その当てはまりの良さは悪くはないこと，Purity 基盤を除く個人基盤と集団基盤の 2 基盤構造の頑健性が示された。

【研究 3】

研究 3 では，「勤勉」因子の信頼性を向上させるため，尺度を修正した上で下位因子の概念的妥当性を相関分析によって検証した。また，修正版予備尺度のその他の因子である「他者への配慮」因子，「階層社会への忠誠」因子，「傷害回避」因子の概念的妥当性も確認したことから，本尺度を日本語版 MFQ (金井, 2013) に代わる尺度として提案した。

【総合考察】

以上の結果から，まず，道徳の因子構造は，道徳基盤理論が主張する 5 基盤構造ではなく，Purity 基盤を除く個人基盤と集団基盤から構成される 2 基盤構造であると示した。つまり，5 基盤構造の因子モデルはすべての社会・民族・文化で当てはまりが良いとは必ずしも言えず，それぞれに合った道徳基盤の理論構築を進めるべきである。次に，道徳基盤理論に追加すべき基盤として勤勉が期待される，勤勉を量的に測定できる尺度の開発を行った。之により、勤勉の存在を洞察するにとどまっていた先行研究 (Suhler & Churchland, 2011; 唐沢, 2013) から一歩踏み込んだ考察を可能にした。道徳基盤理論では，既存の 5 基盤を最終的な道徳の要素とは結論づけてはいないことから，本研究で明らかにされた勤勉が道徳基盤に追加される可能性は十分考えられる。この 2 点を踏まえ，道徳基盤理論の限界点を解決していくためには，文化との相互作用によって道徳構造が異なるという点を考慮した検討と新たな基盤の存在を検証していく必要性がある。本研究は，その前哨的研究となり，人間が持つ多様な価値観の理解に貢献していくことが期待される。 (社会心理学)